

<原著>

中学生のスクールカーストにおける グループ内地位と学校適応感との関連

宮下 彩 長野県諏訪児童相談所
茅野理恵 信州大学学術研究院教育学系

概要

本研究では、スクールカーストの高地位グループ内でのグループ内地位が低い生徒の評価懸念・承認欲求と自尊感情について検討し、さらにこれらが学校適応感に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。大学生・大学院生 226 名を対象に回想法により調査を実施した。結果、高地位グループ内の下位生徒の学校適応感は、上位生徒に比べ低いことが示され、さらに下位生徒は、承認欲求である賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の高さが共に自尊感情の自己価値の随伴性を高めていることが明らかとなった。また、高地位グループ内上位生徒においても、自己価値の随伴性の高さが学校適応感に負の影響を及ぼしていることが示され、高地位グループに所属する生徒でも適応感を得られずに過ごしている生徒の存在が示された。

キーワード：スクールカースト，学校適応感，自尊感情，評価懸念，承認欲求

問題と目的

中学生にとって、学校、特に学級内は生活の多くを占める環境であり、その空間を居心地の良いものとして過ごせるかどうかはとても重要である。その居心地の良さに大きく関わってくるのが、友人との関係性であり、学級内での友人関係をいかに上手く構築できるかが、彼らの学校生活の良し悪しを決める重要な要因であると考ええる。

学級内の友人同士で作られるグループ間の地位を表す「スクールカースト」という概念を通して、学級内での「居心地の良さ」に着目して考えてみると、これまでは上位のグループに所属することは、教室の中で自由に振る舞えることから、上位グループに所属するいわゆる「活発な子達」の学級内での居心地は良いものだと考えられてきた。しかし、上位のグループに所属していたとしても、そのグループ内での立場関係に視点を移すと、グループの中で常に誰かの顔色を伺っていたり、いつも意見が通る子とそうでない子に分かれていたり、全員が自由に楽しく振る舞えているとは限らないのではないかと考えられる。逆に、下位のグループに所属していて、周りからは「地味で大人しい」という評価を

受けていたとしても、その評価に本人の感じる居心地の良さは左右されず、楽しく生活できている子もいるのではないだろうか。

高地位グループに所属しないとられないような生徒は、何に脅かされながら学級内で生活を送っているのだろうか。それに影響すると考えられる個人の特性について本研究では検討していく。一見すると学校で適応的に過ごせているように見える生徒が、実は過ごしにくさを感じているということを明らかにし、今後の学級適応に対する新たな知見を増やすための一助となれればと考える。

本研究におけるスクールカーストとは、鈴木(2012)の定義にならい、学級内の生徒同士で作られるグループ間に生じる地位の差、またその地位格差が他のクラスメートからの個人の印象や、学級内での過ごしやすさに大きく影響する概念とする。また、スクールカーストの高地位グループとは、活発で自らの意見を積極的に主張することのできる生徒が多く所属し、周囲からの「地味で暗い」といったレッテルを貼られることや、意見を通させないといった圧力を受けることなく、比較的学級内で自由に振る舞うことが出来る集団であると定義する。高地位グループの生徒の中には、低地位グループに所属しているよりもクラスでの発言権が得られることや、また低地位グループに所属することで周りから「低地位」として扱われ、学校生活を送りにくくなることを避けたいという思いから、高地位グループに所属しようとする生徒もいると考えられる。そういった生徒の中には、性格や趣味などがそのグループのメンバーとは合わないと感じていながらも、無理をして高地位グループに所属している者もいると考える。その場合、高地位グループ内の生徒に話を合わせる、またグループ内の気が強い生徒の意見が優先されることが多く、自らの意見が通らないことが多い可能性がある。そしてそのような生徒は、グループの中での発言力が低いことなどから立場が低く、その結果、学級内で居心地の悪さを感じるのではないかと考えられる。このような生徒は、周囲から見ると友人も多く、学校や学級内に適応できているように見えるが、自分の意見を自由に言えず、気の強い友人に合わせて行動しているため、心から安心して学校生活を送れているとは言えない状況にあると考える。これまで注目されてこなかった、このような生徒の存在を認識することも重要であると考ええる。

そこで本研究では、まずスクールカーストにおける高地位グループ内で地位の低い生徒が存在すること、そしてその生徒が持つ特性と学校適応感との関連について検討する。高地位グループに所属していることが心理的な負担となっていながらも、なお高地位グループに所属しようとする生徒の行動は、周りから低い地位で見られることを回避したい、つまり周囲からの高い評価を得たい欲求の表れだと考えられる。このような考えに基づいて友人関係を構築している生徒の特徴として、他者からの評価懸念や承認欲求が高いことが予測される。Brown & Bank (2008)の研究では、中高生の仲間集団のうち、人気のある仲間集団は低地位集団に比べ自尊感情が高いという結果が出ている。このことから高地位グループに所属している生徒は自尊感情が高いといえるが、高地位グループに所属している

がその中での地位が低い生徒に関しては、学校適応感が低いという仮説に対して、評価懸念や承認欲求、また自尊感情の高さがどのように影響しているかについて検討する。高地位グループ内の地位が低い生徒は評価懸念・承認欲求が高いことにより、自尊感情については「自己価値の随伴性」という他者からの評価といった外的要因に影響される面に関しては高いという予測ができる。また、外的な価値基準ではなく自己内の価値基準による自尊感情であるとされる本来感についても低いことが予想される。内的な自己の評価が高ければ、例え低地位グループに所属していたとしても、周囲の評価を気にすることなく学級内での居心地の良さを感じることが出来るのではないかと考える。

本研究の目的は、スクールカーストの高地位グループ内でのグループ内地位が低い生徒の評価懸念・承認欲求と自尊感情について検討し、さらにこれが学校適応感もらす影響について明らかにすることである。

方法

調査対象者

大学生・大学院生 232 名（男性 74 名、女性 157 名、不明 1 名、平均年齢 22.5 歳）。このうち、回答に不備のあった者を除き、分析対象者は 226 名（男性 73 名、女性 152 名、未回答 1 名、平均年齢 21.9 歳）であった。

材料

(1) **スクールカースト** フェイスシート項目として、年齢、性別、中学生の時に自分クラスに友達グループが存在していたかについて、またそのグループに所属していたかについてそれぞれ「はい」「いいえ」で尋ねた。グループに所属していたと答えた者に対し、クラス内で中心的な／人気のあるグループに所属していたことがあるか、またグループ内で自分は中心的な存在／人気だったかについて、それぞれ「全くそう思わない=1」、「そう思わない=2」、「どちらでもない=3」、「そう思う=4」、「とてもそう思う=5」の 5 件法で回答を求めた。

(2) **青年用適応感尺度** 大久保(2005)によって作成された全 23 項目の尺度のうち、水野・太田(2017)の研究に基づき、中学生時の学校適応感を測る目的で、4 つの下位尺度のうち「Ⅰ居心地の良さの感覚」「Ⅲ被信頼・受容感」「Ⅳ劣等感のなさ」の 3 つを用いた。「あなたが中学生の時を思い返して、学校生活の中で以下のような考えがどの程度浮かんでいたかお答えください。」という教示文で尋ね、回答は「全くあてはまらない=1」、「あまりあてはまらない=2」、「どちらともいえない=3」、「ややあてはまる=4」、「非常によくあてはまる=5」の 5 件法で求めた。

(3) **対象別評価懸念尺度** 臼倉・濱口(2015)によって作成された対象別評価懸念尺度の下位尺度の中から「友人に対する評価懸念」を用いた。8 項目からなり、(2)と同様の教示文で尋ねた。回答は「あてはまらない=1」、「あまりあてはまらない=2」、「どちらでもない

=3]、「まあまああてはまる=4]、「あてはまる=5」の5件法で求めた。

(4) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 小島・太田・菅原(2003)によって作成された全18項目の尺度を承認欲求の強さを測る目的で用いた。(2)と同じ教示文で尋ね、回答(3)同様の5件法で求めた。

(5) 自己価値の随伴性尺度 伊藤・児玉(2006)によって作成された全15項目の尺度を随伴性自尊感情の強さを測る目的で用いた。(2)と同じ教示文で尋ね、回答は(3)と同様の5件法で求めた。

(6) 本来感尺度 伊藤・児玉(2005)によって作成された全7項目の尺度を自分自身に感じる本当らしさの感覚である本来感の強さを測る目的で用いた。(2)と同じ教示文で尋ね、回答は(3)と同様の5件法で求めた。

手続き

質問内容はインターネット上に Google フォーム作成した調査用紙を公開し、縁故法によって回答を求めた。

調査時期

2020年10月~12月に実施した。

倫理的配慮

調査の実施に先立ち、信州大学教育学部研究委員会倫理審査部会の審査を経て、研究実施の承認を得た(管理番号:20-11)。

結果

グループ間地位・グループ内地位の群分け

材料(1)の質問項目から、対象者を中学生時に所属していたグループの地位の上下に基づき群分けを行った。まず、「クラス内で中心的な／人気のあるグループに所属していたことがあるか」という質問に対し、1・2と回答した者を「グループ間地位下位」、3と回答した者を「グループ間地位中位」、4・5と回答した者を「グループ間地位上位」に分類した。さらに、「グループ内で自分は中心的な存在／人気だったか」という質問に対し、1・2・3と回答した者を「グループ内地位下位」、4・5と回答した者を「グループ内地位上位」に分類した。最終的に「低地位グループ内下位($n=77$)」、「低地位グループ内上位($n=19$)」、「中地位グループ内下位($n=43$)」、「中地位グループ内上位($n=10$)」、「高地位グループ内下位($n=31$)」、「高地位グループ内上位($n=15$)」の6群に分かれた。

グループ間地位と各概念との関連

グループ間地位の上下によって評価懸念、承認欲求、自己価値の随伴性、本来感の各概念に差があるかについて検討するために、グループ間の地位を下位群、中位群、上位群の3群に分け、各群を独立変数、「評価懸念」「承認欲求」「自己価値の随伴性」「本来感」の各下位尺度得点の平均値を従属変数として一要因分散分析を行った。結果、「評価懸念」の

主効果が有意 ($F(2, 192)=3.09, MSE=0.77, p=.048$) であった。分散の等質性が有意であると言えなかったため、Games-Howell 法による多重比較を行った結果、グループ間地位高群が低群に比べ有意に低かった ($p=.045$)。

グループ内地位と学校適応感との関連

グループ内地位の上下によって、評価懸念、承認欲求、自己価値の随伴性、本来感の各概念の平均値に差があるか検討するために、6 群を独立変数、「評価懸念」「承認欲求」「自己価値の随伴性」「本来感」を従属変数として一要因分散分析を行った。結果、「本来感」の主効果のみ有意傾向であった ($F(5, 189)=, MSE=0.78, p=.075$)。群ごとの平均値と標準偏差、最小値、最大値を表 1 に示す。

表 1 グループ間地位内上位・下位群ごとの各尺度得点の平均値と標準偏差

		平均値	標準偏差	最小値	最大値
評価懸念	低地位グループ下位	3.37	0.83	1.00	5.00
	低地位グループ上位	3.22	0.98	1.13	5.00
	中地位グループ下位	3.14	1.04	1.00	5.00
	中地位グループ上位	3.00	0.83	1.88	4.13
	高地位グループ下位	2.96	0.96	1.00	4.63
	高地位グループ上位	2.90	0.93	1.25	4.38
承認欲求	低地位グループ下位	3.09	0.54	1.61	4.56
	低地位グループ上位	3.22	0.50	2.00	4.28
	中地位グループ下位	3.18	0.68	1.44	4.39
	中地位グループ上位	3.24	0.51	2.50	4.33
	高地位グループ下位	3.15	0.78	1.39	4.22
	高地位グループ上位	3.13	0.63	1.89	4.28
自己価値 の随伴性	低地位グループ下位	3.54	0.63	1.93	4.67
	低地位グループ上位	3.76	0.48	2.73	4.67
	中地位グループ下位	3.43	0.75	1.73	4.93
	中地位グループ上位	3.51	0.50	2.87	4.60
	高地位グループ下位	3.63	0.56	2.00	4.47
	高地位グループ上位	3.54	0.64	2.13	4.60
本来感	低地位グループ下位	2.76	0.83	1.00	4.86
	低地位グループ上位	2.98	0.95	1.43	5.00
	中地位グループ下位	3.14	0.93	1.43	4.71
	中地位グループ上位	3.19	0.57	2.43	4.43
	高地位グループ下位	2.90	0.84	1.57	4.29
	高地位グループ上位	3.38	1.06	1.86	4.71

高地位グループ内の地位の上下によって、適応感に差があるか検討するために、高地位グループ下位群と高地位グループ上位群を独立変数、「学校適応感」を従属変数として t 検定を行った。その結果、両群間の平均値の差は有意であった（両側検定： $t(44) = -2.31, p = .026$ ）。また、青年用適応感尺度の下位尺度の平均値の差についても t 検定を行ったところ、「被信頼・受容感」において差が有意であった（両側検定： $t(44) = -2.9, p = .006$ ）。それぞれの平均値、標準偏差を表 2 に示す。

表 2 高地位グループ下位・上位の学校適応感・青年期適応感の平均値と標準偏差

		平均値	標準偏差
学校適応感	高地位グループ下位	3.70	0.70
	高地位グループ上位	4.10	0.46
居心地の良さの感覚	高地位グループ下位	3.81	0.75
	高地位グループ上位	4.12	0.73
被信頼・受容感	高地位グループ下位	3.60	0.88
	高地位グループ上位	4.21	0.54
劣等感のなさ	高地位グループ下位	3.61	0.83
	高地位グループ上位	3.96	0.67

各概念がカースト高地位グループ生徒の学校適応感に及ぼす影響

評価懸念と承認欲求の高さが、自尊感情の自己価値の随伴性と本来感を介して学校適応感に影響を及ぼすというモデルを検討するために共分散構造分析を行った。分析には AMOS(Version25)を用いて、探索的にモデルを確定する手続きをとった。その結果、評価懸念からのパスが不適当であったため削除した。モデル適合度は $GFI=1.000$, $CFI=1.000$, $RMSEA=.000$ となり、適合していると判断した。以下の図 1 に最終的なパス図を示す。

カースト高地位グループ内の下位生徒と上位生徒それぞれにおいて、各概念から学校適応感への流れを比較するため、最終的なパス図を用いて多母集団同時分析を行った。その結果、高地位グループ内下位生徒において、賞賛獲得欲求から自己価値の随伴性に正の、拒否回避欲求から自己価値の随伴性に正の有意なパスが見られた（図 2）。高地位グループ内上位生徒においては、自己価値の随伴性から学校適応感に有意な負のパスが見られた（図 3）。また高地位グループ内上位生徒・下位生徒どちらも、本来感から学校適応感に正の、拒否回避欲求から本来感に負の有意なパスが見られた。高地位グループ内上位生徒・下位生徒それぞれのパス図間で、係数間に有意な差のあるパスは見られなかった。

グループ内地位と学校適応感との関連

グループ内の地位ごとの学校適応感の平均値に差があるか検討するために、グループ内

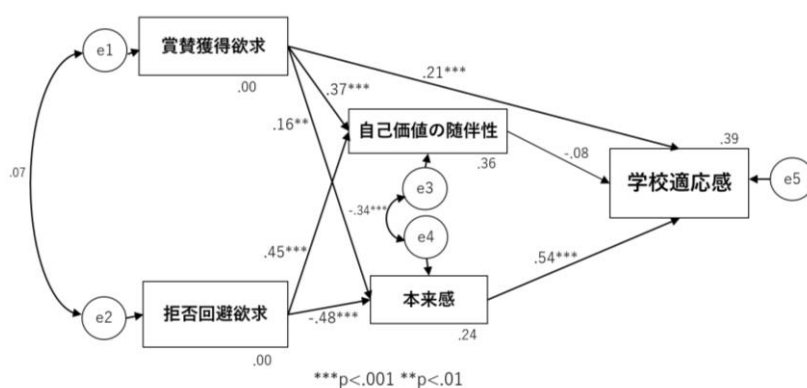


図1 承認欲求の高さが自尊感情の自己価値の随伴性と本来感を介して学校適応感に及ぼす影響

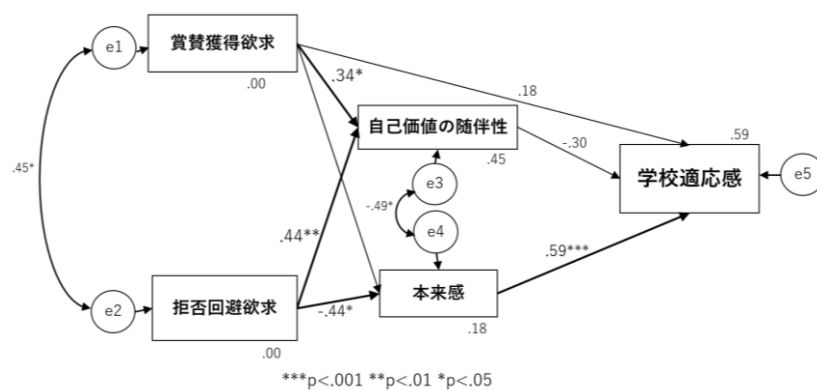


図2 高地位グループ下位生徒における各概念が学校適応感に及ぼす影響

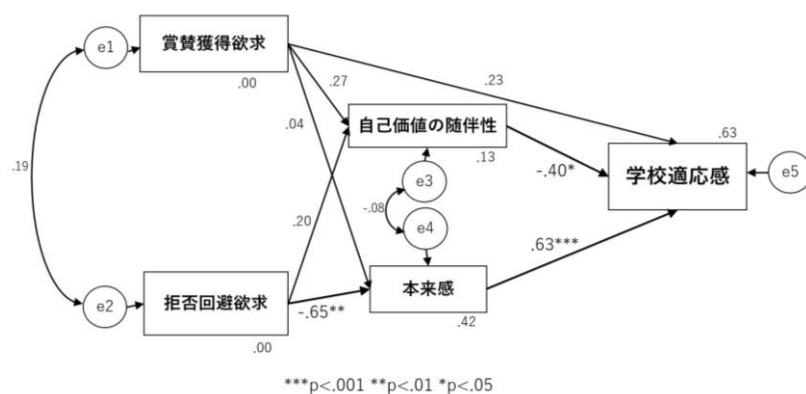


図3 高地位グループ上位生徒における各概念が学校適応感に及ぼす影響

地位下位群，中位群，上位群を独立変数，「学校適応感」を従属変数とする一要因分散分析を行ったところ，主効果が有意 ($F(2, 192) = , MSE = 0.464, p = .00$) であった。等分散性が有意であったため，Hochberg の方法による多重比較を行った結果，グループ内の地位が下位／中位，中位／上位，下位／上位それぞれの平均値の差が全て有意であった ($p = .030, p = .019, p = .00$)。グループ内地位ごとの度数，平均値，標準偏差，最大値，最小値を表 3 に示す。

表 3 グループ内地位ごとの平均値と標準偏差

		度数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
評価懸念	グループ間地位下位	93	3.34	0.86	1.00	5.00
	グループ間地位中位	53	3.11	1.00	1.00	5.00
	グループ間地位上位	46	2.94	0.94	1.00	4.63
承認欲求	グループ間地位下位	93	3.12	0.54	1.61	4.56
	グループ間地位中位	53	3.19	0.65	1.44	4.39
	グループ間地位上位	46	3.14	0.73	1.39	4.28
自己価値 の随伴性	グループ間地位下位	93	3.58	0.60	1.93	4.67
	グループ間地位中位	53	3.45	0.71	1.73	4.93
	グループ間地位上位	46	3.60	0.58	2.00	4.60
本来感	グループ間地位下位	93	2.80	0.86	1.00	5.00
	グループ間地位中位	53	3.15	0.87	1.43	4.71
	グループ間地位上位	46	3.06	0.93	1.57	4.71

考察

スクールカースト高地位グループに所属する生徒の特徴について

まず，スクールカースト高地位グループに所属する生徒の評価懸念と承認欲求についてであるが，本研究では，スクールカーストにおける高地位グループ内の下位に所属する生徒は，同じく高地位グループ内の上位に所属する生徒と比べ評価懸念が高く，また承認欲求が高いという仮説を立てていた。結果として，高地位グループ内の上位生徒と下位生徒間の評価懸念と承認欲求における差は見られなかったが，評価懸念についてはグループ間の地位ごとに分けられた低地位グループと高地位グループとの間で差があり，高地位グループの評価懸念が低地位グループに比べ低いことが明らかになった。また，高地位グループに属する生徒は，承認欲求のうち，拒否回避欲求が自尊感情の本来感に負の影響を及ぼしていることも示された。これらの結果からは，鈴木(2012)などの先行研究で明らかになっている「スクールカーストの高地位グループ」の特徴を表している部分と，それとは異

なる特徴を示している部分が見受けられる。本研究における、高地位グループに属する生徒は、学級内の他の生徒からの信頼を受け、またそのことにより他の生徒らに受容されている部分があると考えられる。このことより、学級内でクラスメートから仲間外れにされるといった不安を感じることは少ないと考えられるが、同時にクラスの代表として意見を述べたり、振る舞ったりすることを他の生徒から期待されており、そのような目立つ行動を取る際に、他の生徒からどう思われるだろうかということについて気にしながら発言や行動をしなければならない状況にあったのではないかと推察する。このような意識を持つ生徒が、高地位グループ内での地位の上下にかかわらず存在したため、今回の研究では高地位グループ内での評価懸念と承認欲求の差が見られなかったのではないかと考える。

次に、高地位グループに所属していた生徒の自尊感情の特徴についてである。仮説では、高地位グループ内の下位に所属する生徒の自尊感情は評価懸念と承認欲求からの影響を受け、自己価値の随伴性については高く、本来感は低くなると予測していた。結果、承認欲求のうち賞賛獲得欲求と拒否回避欲求のどちらもが、自己価値の随伴性を高めていた。高地位グループの中で下位に属する生徒は、学級内で認められたい、注目を得たいという欲求から何らかの努力をして高地位グループに所属している可能性が考えられる。また、高地位グループに所属し続けられなくなることで、学級内の他の生徒からの評価が下がることも同時に恐れている可能性があり、様々なところで高地位グループ内での人間関係を維持するために、他者からどれだけ好かれているか、またどう見られているかということに気にしながら過ごしていることが推察される。それらの状況を背景にしながら、「クラス内で人気があり、皆から信頼されている」と称される高地位のグループに所属しているという事実を維持することによって、自己の価値を保つという形での自尊感情を高めることにつながっていることが推察される。

スクールカーストグループ内地位と学校適応感との関連

本研究では、高地位グループ内の下位に所属する生徒は、同じく高地位グループ内の上位に所属する生徒に比べて学校適応感が低くなるという仮説を立てていた。結果として、高地位グループ内下位生徒の学校適応感は上位生徒に比べ低かった。また、適応感の中でも周りから頼られている、期待されていると感じる「被信頼・受容感」について上位生徒よりも下位生徒の方が低いという結果が得られた。先にも述べたが、本研究における高地位グループに所属する生徒は、他のクラスメートからの信頼や期待をされていた生徒の集まりであり、その中でもグループの上位に所属していた生徒はより周囲からの高い期待や評価を受けていたと推察される。高地位グループ内の下位生徒は、上位生徒よりも周囲からの信頼や受容されている感覚が低く、そのことが学校適応感を低下させていた可能性があると考えられる。しかし同時に、高地位グループ内上位生徒において、自尊感情の中でも外的な評価に影響される自己価値の随伴性と学校適応感との間に負の関連が見られた。学級内で他の生徒からの高い評価を受けることは外的な評価に伴う自尊感情を高めること

につながるが、周囲からの期待に応えなければならないというプレッシャーへと変化した場合、学校適応感を下げることにつながる可能性についても示唆された。また、高地位グループ内の地位の上下にかかわらず本来感が高まることにより、学校適応感が高まること示されている。この結果は、他の概念間における効果の大きさと比較しても最も大きな効果があることが示されており、ありのままの自分を学級内で表現できるということは学校適応感を高める大きな要因の一つとなっていると言えるだろう。

グループ間の地位の要因を排除したグループ内の地位と学校適応感との関連については、グループ内地位が高い生徒の学校適応感が高い結果となった。このことは水野・加藤・川田（2015）の研究で述べられていた通り、地位の高いグループに属していてもその生徒のグループの中での地位が高くなければ、学校への適応は低いということが改めて示されたと言える。

本研究において、高地位グループ内での地位の上下により学校適応感に差があるということが明確に示された。これまでスクールカーストの高地位に所属する生徒は学校適応感が高いとされてきたが、高地位グループに所属する生徒の中にも、学級内で適応感を感じられずに過ごしている生徒が存在していることが示された。高地位グループ内における地位の低い生徒は、所属グループの地位の高さにより自己の価値を決定づけている可能性が示され、高地位グループに所属していることで自己価値の随伴性という自尊感情は保たれているが、それは学校適応感の低さに表れているように適応的な自尊感情の高さとは言い難い。自尊感情の中でも、他者との比較ではなく「自分らしく」いられる感覚である、本来感を高めることは学校適応感の上昇に大きく貢献することが本研究において示唆されている。このことから、ありのままの自分で振る舞っても安全だと感じられる空間を学級内で作っていくことが、あらゆる生徒の不適応感を改善していくために必要になってくると考える。久保田(2018)の中学生の学級内における地位格差の発生メカニズムに関する研究では、学級内の地位格差が生じにくい要因の一つに、生徒が教師に受け入れられていると感じ、かつ教師を信頼している場合に、学級集団内に規律が確立され、自身の所属している学級集団に居心地の良さを感じることが明らかになったと述べている。このことから、学級内の生徒がグループ間の地位を意識することなく、学級内における教師と生徒の信頼関係を構築し、教師が生徒に対する受容的・共感的態度を示すことで、学級内の地位格差に起因する生徒の過ごしづらさが低減するのではないかと考える。鈴木(2012)の研究では、教師も学級内の「スクールカースト」による地位の差を認識しており、上位グループの生徒をクラスの代表として選出するなど、地位の差を利用して学級経営を行うこともあると指摘されている。そうした教師の行動が、学級内での地位格差をより明確にし、学級内の生徒の「上位に位置することは価値がある」という認識を強めることにつながることを考えられる。教師が生徒の学級内でのグループ間の地位格差を把握しておくことは重要であるが、それを殊更に強調するような学級の雰囲気を作らないために、生徒の持つ良

さを多面的な視点で見ることや、その良さを認め、伸ばすような言葉掛けを行うことが大切だと考える。そういった対応を教師が日頃から生徒との関わりの中で実践していくことで、学級内で自分らしく振る舞っても大丈夫だという安心感を増やし、安心感が本来感をより高めることにつながり、ひいては学校適応感を高めていくのではないかと考える。

今後の課題

本研究における今後の課題を2点述べる。1点目は、本研究では、対象者が大学生と大学院生であり、中学生時に学校生活の中で感じていたことについて本人の回想により回答を得たことである。先行研究では、中学生を対象にして研究を行っており、中学生が学校生活の中で現在感じている感覚について調査することで、スクールカーストの中に現在身を置く生徒の姿を明らかにすることができたと考える。2点目は、高地位グループ内の下位生徒の特徴について、今回の研究で扱った概念のうち高地位グループ内上位生徒との統計的に明らかな差は見出されなかった。しかし、高地位グループ内の不適応感を持つ生徒の存在が明確になったことで、彼らの持つ特徴について今後より詳細に検討していくことが必要であると言える。今後はインタビュー調査などを用い、高地位グループに所属する生徒が感じている思いを本人の供述などから明らかにしていくことも方法の1つとして考えられる。

今回の研究では高地位グループ内の地位に着目したが、地位の上下といった分類に基づくかなくとも、上位生徒の中にも不適応につながる個人の特徴を持つ生徒がいるという可能性も考えられる。これらの見解から、スクールカーストの地位と学校適応感との関連について、より幅広い知見に基づいて研究を進めていく必要があると考える。

引用文献

- Brown, B. B., & Bank, H. V. (2008). Smoke in the Looking Glass: Effects of Discordance Between Self- and Peer Rated Crowd Affiliation on Adolescent Anxiety, Depression and Self-feelings. *Journal of Youth Adolescence*, 37, 1163–1177.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2006). 大学生の主體的な自己形成を支える自己感情の検討-本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して- 教育心理学研究, 54, 222-232.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 86-98.
- 久保田真功(2018). クラス内ステイタスの構造とその発生メカニズムの検討：中学生を対象とした質問紙調査をもとに 教職教育研究センター紀要, 23, 43-54.
- 水野君平・加藤弘通・川田学 (2015). 中学生における「スクールカースト」とコミュニケーション・スキル及び学校適応感の関係：学級内における個人の地位と集団の地位と

いう視点から 子ども発達臨床研究, 7, 13-22.

大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究, 53, 307-319.

鈴木翔 (2012). 学級内カースト 光文社.

臼倉瞳・濱口佳和 (2015). 小学校高学年および中学生における対象別評価懸念と適応との関連 教育心理学研究, 63, 85-101.